

研究報告

性のピアエデュケーションにエデュケーターとして参加した 看護学生の体験と自己肯定意識の変化

上田 伊佐子^{1,2)}, 高木 彩¹⁾, 川西 千恵美³⁾

¹⁾徳島県立富岡東高等学校羽ノ浦校, ²⁾徳島大学大学院保健科学教育部, ³⁾徳島大学大学院ヘルスパイオサイエンス研究部

要旨 本研究の目的は, 性のピアエデュケーションにエデュケーターとして参加した学生が自己肯定意識を高めるのかどうか, また, エデュケーターとしての活動からどのような体験を得ているのかを明らかにすることである. 5年一貫課程の看護学生11人が, 中学生に性のピアエデュケーションを実施した. 前後に「自己肯定意識尺度」の回答を求め, 同課程の看護学生28人と比較した. また記述回答から, 活動で得た体験の表現された記述を抽出し内容分析した. 対照群は「自己肯定意識」に変化がなかった一方で, ピアメンバーは6サブスケール中4つが有意に変化した ($p < 0.05$). またピアエデュケーションの体験は【エデュケーターとしてのスキルと役割に気づく】【自らの性の知識・理解の増加を自覚する】【自らのセクシュアリティの捉え方の変化に気づく】に特徴付けられた. ピアエデュケーションの準備を含めた一連の過程が, エデュケーターにとって自己を肯定的に捉え直すうえで有効であることが示唆された.

キーワード: ピアエデュケーション, 性教育, 自己肯定意識

はじめに

思春期から青年期にかけての時期は「自分とは何か」という自己意識を模索しながら高めていく時期とされている. 自己意識は心理学分野において個人の行動を規定する内的な準拠軸として考えられ, 適応や心理的健康の指標としてこれまでも研究が進められてきている¹⁾. 自我同一性の心理社会的発達を明らかにした Erikson²⁾によれば, 青年期は職業とイデオロギーへのコミットメントが成長する時期であり, また自己のアイデンティティ獲得を発達課題とする時期でもあり, 常にその拡散の危機に直面する. つまり, 肯定的な自己意識をもつことは青年期に生きる若者の発達課題であり, 青年期教育現場における課題ともいえよう.

性教育は, 自らをどう生きるかという「生」の教育であるといわれている. 青年期の性の発達課題は, 性的機

能の成熟と情緒の不安定さのなかで, 他者から影響を受けながらも, 自分自身の「性」のあり方を問い直して「生」を模索することであると考えられる. 白井³⁾は思春期ピアカウンセリング養成講座を受講した大学生の自尊感情が高まったことを明らかにしている. また前田⁴⁾は思春期ピアカウンセリングを受けた高校生の自己効力感と自尊感情が受講後に上昇したことを示し, 性教育によって自己分析が深まり自分認知が再構成されたと考察している. このように性を学ぶことは, 自己を見つめる機会となり, 肯定的な自己意識をもつことに寄与できるのではないかと期待できる. また, 性教育では「ピア(Peer)」による教育手法が注目されている. ピアエデュケーションは1970年代に英国で発祥し, 思春期の子ども達が, 親や教師よりも同年代のピアに信頼を寄せ, 影響を受けることに理論的根拠をおく. ピアエデュケーションにより学生の性とリプロダクティブ・ヘルスの知識が高まる⁵⁾ことが報告されており, わが国でも高村ら⁶⁾がピアカウンセラー養成のモデルカリキュラムを開発し, その成果が報告されてきている⁷⁾. このようなピアエデュケーションは, 性に対する正しい知識やスキル, 感情を共有し合うことにより若者の主体的な行動変容を支える

2010年12月20日受付

2011年2月3日受理

別刷請求先: 上田伊佐子, 〒779-1101 徳島県阿南市羽ノ浦町中庄市50-1 徳島県立富岡東高等学校羽ノ浦校

ことを目指すものである。エデュケーターとなる若者がその役割を果たすためには、自らも問題に正しく対処できる自己決定や問題解決の能力を高めておくことが求められ、知識やスキルを身につける過程でのエデュケーター自身の成長も期待できる。しかし性のピアエデュケーションによる効果を、エデュケーターの成長の側面から捉えた研究はあまり見当たらない。

本研究では、性のピアエデュケーションにエデュケーターとして参加した学生が自己肯定意識を高めるのかどうかについて、また、エデュケーターとしての活動からどのような体験を得ているのかについて明らかにすることを目的とする。

用語の説明と定義

ピア：ピア (Peer) はプログレッシブ英和中辞典⁸⁾によると「(社会的に) 同等の地位の人, 同僚, 対等者, (能力・資格・年齢などが) 同等の人, 友人, 仲間」とある。「同じ問題や障害および疾病をもつもの同士」⁹⁾の意味合いで用いられることもあるが、性教育の分野では一般に「仲間」として使用されている。ここでは「青年期の仲間」とし、その範囲は14歳から19歳までとした。

ピアエデュケーション：ピアからピアへという視点にたったピアカウンセリングやピアエデュケーションは、ともにヘルスプロモーションの理念に基づいている。国際家族計画連盟 (International Planned Parenthood Federation: IPPF) は、ピアカウンセリングを「同年代または所属を同じくするグループが、情報や知識・価値観・スキル・行動を分かち合うこと」と定義している。このピアカウンセリングに対して、レクチャーの要素が多い教育提供型アプローチはピアエデュケーションと表現される。ここでは、ピアエデュケーションを、看護学生と中学生で構成されるピアグループにおいて、看護学生が中学生に性についての正しい知識・スキル・行動をエデュケーションして、性についての価値観を共有し合うことと定義する。

ピアプロジェクト：ここではピアメンバーによるピアエデュケーションの準備から当日までを含めた一連の取り組みをいう。

ピアメンバー：ここではピアエデュケーションにエデュケーターとして参加する看護学生をいう。

研究方法

1. 研究協力者

5年一貫課程に在籍する看護学生で、自主的にピアメンバーになることを希望した11人、18~19歳の女子である。対照群を同じ課程、学年に属する学生28人 (女子) とした。両者とも3年生で母子看護1単位を履修済み、4年生で母性看護学2単位を履修中であり、日本助産師会に所属する開業助産師から思春期性教育についての講義を2時間受けている。臨地実習は高校2・3年生で基礎・成人・老年の領域で計5単位の経験がある。

2. ピアプロジェクトの概要

1) 使用したピアアプローチの種類

ピアによる性教育を進めるにあたっては、その質保証の点からピアアプローチの種類とピア養成をする資源をうまく組み合わせる必要があると考えられる。ピアアプローチの種類として、忠津ら¹⁰⁾は、Nancy Fee & Mayada YOUSSEF の分類をカウンセリング手法の必要度から分け、5つに再分類している。それは、情報提供型、教育提供型 A (レクチャーのみ)、教育提供型 B (レクチャーとピアカウンセリング手法を用いたディスカッションおよびロールプレイ)、教育提供型 C (ピアカウンセリング手法を用いたディスカッションおよびロールプレイ)、カウンセリング提供型 (個別電話相談または個人面談) の5つであり、後のアプローチほどカウンセリングの要素が多くなる。レクチャーの要素が多い教育提供型アプローチに、エデュケーターとして看護学生を活用することにより、カウンセリング手法を習熟させる訓練は効率化され、その質保証が可能であると考えられる。そこで本研究では教育提供型 B のピアアプローチの手法を用いた。

2) ピアプロジェクト (準備)

今回のピアプロジェクトの当日までの準備を図1に示した。準備を2ヵ月前より開始した。まず、母性看護学を担当する教員が「ピアエデュケーションとは」「人間の性、セクシュアリティとは」というテーマで講義を4時間行い、ピアエデュケーションや性教育に関する図書として「思春期の性の健康を支えるピアカウンセリング・マニュアル—ピアカウンセラー (学生) 版」¹¹⁾他5冊を紹介した。その後は自律的なグループ課題学習とした。性に関する正しい知識を学ぶ他、中学生のニーズや当日のプログラムを検討するなかで、ピアメンバー間で自らのセクシュアリティについて語りあうことや、自分

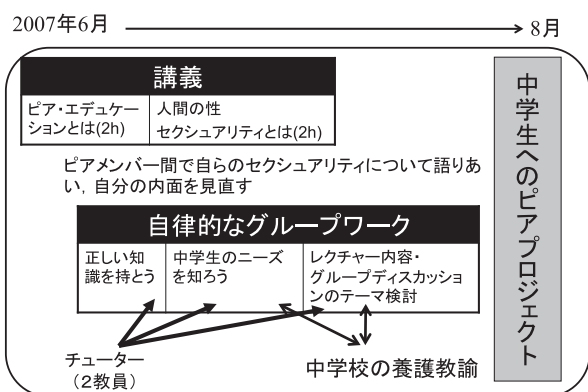


図1 ピアプロジェクトの当日までの準備

の内面を見直すことを課題とした。その間、教員2人がチューターとして関わった。中学校の養護教諭と事前に2回協議を持ち、中学生の性意識やニーズを把握するための事前アンケートの作成や、当日のプレゼンテーション、グループディスカッションのテーマなどについて協議した。この一連の作業のほとんどは授業外の時間が用いられ、ピアメンバーによって自主的に進められていった。

3) ピアプロジェクト (当日)

2007年8月に同地域の中学3年生22人(男11人, 女11人)に対して、120分かけて実施した。中学生の参加者については中学校の養護教諭の協力を得た。導入にゲームを取り入れたグループづくりを行い、リラックスして話し合える場を設定した。主にレクチャーとグループディスカッションで構成した(図2)。事前アンケートの結果報告と思春期の性(こころ編・からだ編)のプレゼンテーションを行った。これには性に関する基礎的知識として9内容の他、例えば、「もし告白するなら直接会うよりもメールがいい?」「結婚や出産、育児は女の幸せと思う?」などの個人的な考えを問う8質問を含めた内容とした。その後に行われたグループディスカッションは、「メル友」がテーマであった。つきあっている彼(彼女)から家人が不在の時に家に誘われた場面をピアメンバーが寸劇で示し、自分ならこんなときどうするかをグループ内で話し合った。グループは中学生4~5人に対してピアメンバーが2~3人ずつ入った。終了後に、中学生がグループの中では発言しにくかったことで個人的にピアメンバーに話したいことがあれば、話ができるようにと自由な時間をもった。このピアプロジェクトを通して、「互いに相手のことを批判しないこと、知り得た個人の秘密は決して口外しないこと、しかし友

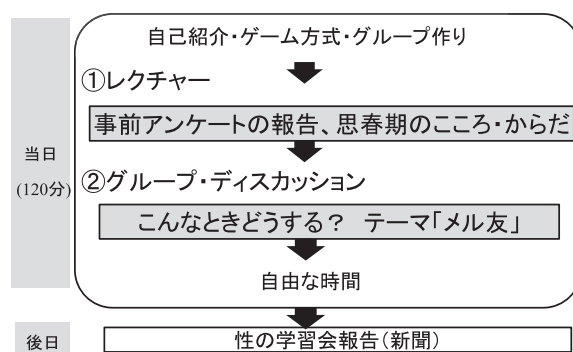


図2 中学生へのピアプロジェクト (当日・後日)

達に伝えるべき正しい知識については伝えていく」ことをルールとした。後日、ピアメンバーはこのレクチャーの概要と思春期の性の基礎的な知識を新聞にまとめて、参加中学生を通して他の中学生に報告した。

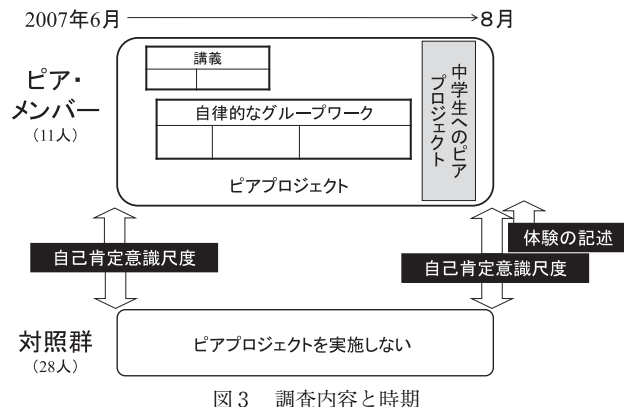
3. ピアメンバーの自己意識の変化

ピアメンバーの自己意識の変化を見るために、平石¹²⁾の「自己肯定意識尺度」を用いた。平石は青年期における自己意識の発達を、自己への態度の望ましさ(自己肯定意識)と自己の安定性(自己安定性次元)の視点から捉えようとしており、「自己肯定意識尺度」はこのうちの自己への態度の望ましさを測定する尺度である。平石は自己肯定意識を、自己概念における評価次元を表すself-esteemの下位概念としている。「自己肯定意識尺度」は、自己健康性の肯定性-否定性の次元から作成され、項目的にも青年期特有の心性を反映させたものであり、青年期の自己評価や適応感の測定が可能であることから、今回これを使用した。

「自己肯定意識尺度」は対自己領域と対他者領域に大きく二分され、それぞれが3つのサブスケールからなる。対自己領域のサブスケールは「自己受容」「自己実現態度」「充実感」、対他者領域のサブスケールは「自己閉鎖性・人間不信」「自己表明・対人的積極性」「非評価意識・対人緊張」である。41項目からなり、「あてはまる」から「あてはまらない」までの5選択肢で回答を求め、順に5~1点を配し、サブスケールごとの合計値で比較する。各サブスケールのクロンバック α 係数は平石の研究では0.69~0.86、本研究では0.68~0.92であり、信頼性を確保している。

ピアメンバーと対照群の両群に、ピアプロジェクトを開始する前と終了後に「自己肯定意識尺度」の調査を行い、それぞれを前後で比較した。また、その結果を補う

ために、実施後にピアメンバーにピアプロジェクトでの体験について記述回答するよう求めた。調査内容と時期を図3に示した。



4. 分析

「自己肯定意識尺度」には Wilcoxon の符号付き順位検定と Mann-Whitney の U 検定を行った。有意水準は 5% とした。SPSS15.0J for Windows を用いて分析した。記述回答の分析は Berelson の内容分析の手法¹³⁾を用いた。ピアプロジェクトでの体験が表れた文章を抽出し記録単位とした。よく似た意味内容ごとに同一単位群としてまとめ、さらにカテゴリ化した。分析結果の信頼性については、10年以上看護教育に携わる 2 人の教員により、スコットの式¹⁴⁾によるカテゴリ分類の一致率を算出した。

5. 倫理的配慮

研究協力者には文書で研究の趣旨、提出は任意であること、成績には影響しないこと、無記名で内容は統計的に処理され個人が特定されないこと等を説明し、同意を得た。留め置き法で回収した。「自己肯定意識尺度」の前後での対応がある変化をみるために、個人が特定されない任意の数字や文字を記録してもらった。

結 果

1. 自己肯定意識の変化

ピアメンバー11人(回収率100%)と、対照群25人(回収率89.3%)の36人から回収があった。記載漏れが無く、前後の対応が確認できるピアメンバー10人(有効回答率90.9%)と、対照群22人(有効回答率88.0%)の32人を分析対象とした。

実施前のピアメンバーと対照群の「自己肯定意識尺

度」の平均値の比較を図4に示した。実施前では対自己領域のサブスケール「充実感」のみ、ピアメンバーが有意に高かった ($p < 0.05$) が、他の5サブスケールに差はなく、ピアメンバーと対照群はよく似た自己肯定意識をもつ集団であった。

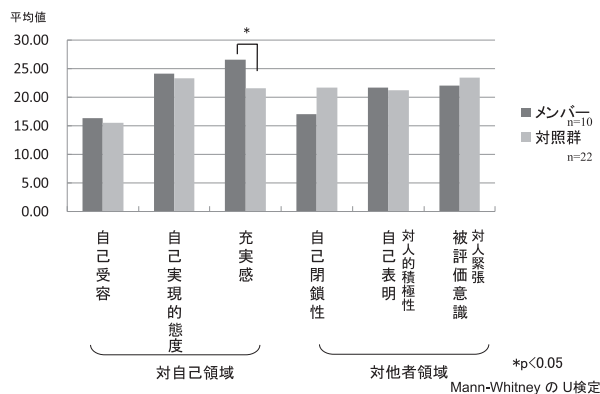


図4 実施前のピアメンバーと対照群の自己肯定意識の比較

次にピアプロジェクト前後の平均値の比較を対照群、ピアメンバー別に図5・6に示した。対照群では、6つのサブスケール全てにおいて前後に変化はみられなかった。一方、ピアメンバーは実施後4つのサブスケールに

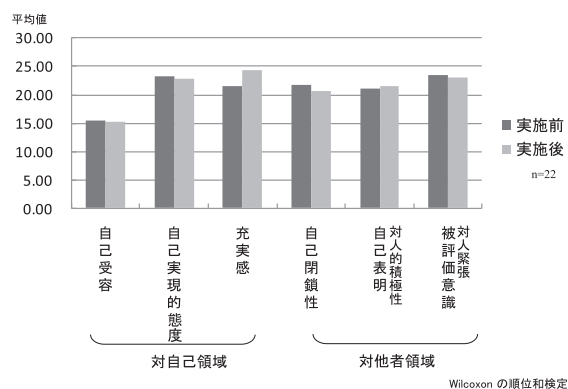


図5 実施前後の自己肯定意識の変化 (対照群)

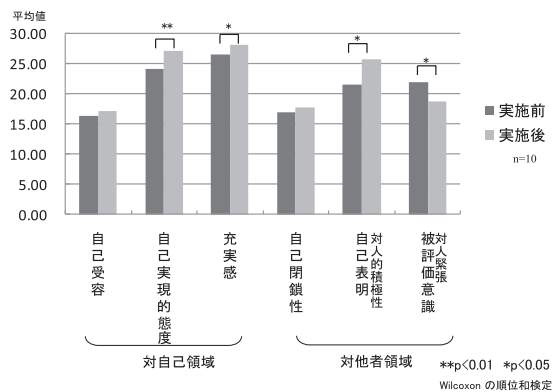


図6 実施前後の自己肯定意識の変化 (ピアメンバー)

変化が見られた。対自己領域の「自己実現的態度（得点範囲7-35）」が実施前 24.11 ± 5.49 から実施後 27.09 ± 4.81 に ($p < 0.01$), 「充実感 (6-30)」が 26.56 ± 6.78 から 28.09 ± 9.38 に有意に上がった ($p < 0.05$)。対他者領域では「自己表明・対人的積極性 (7-35)」が実施前 21.67 ± 4.30 から実施後は 25.82 ± 5.56 と有意に上がり ($p < 0.05$)、「自分は他人よりおとっているかすぐれているかを気にしている」などの質問項目で構成された「非評価意識・対人緊張 (7-35)」は 22.00 ± 4.18 から 18.82 ± 7.04 と有意に低下した ($p < 0.05$)。

2. ピアプロジェクトでの体験

ピアプロジェクトでどのような体験をしたのかについての記述回答では、分析対象となったピアメンバー11人（回収率100%）の記述は54記録単位に分割でき、7カテゴリが形成され、表1に示した。【エデュケーターとしてのスキルと役割に気づく】【自らの性の知識・理解の増加を自覚する】【自らのセクシュアリティの捉え方の変化に気づく】【相手の中学生に今後を期待する】【取り組みに対して自己達成感を得る】【性意識の高まりを自覚する】【相手の立場にたつことの大切さに気づく】であった。カテゴリの分類への一致率は、92.2%と86.4%で、信頼性を確保していることを示した。以下にカテゴリを【 】で、記録単位「 」で表し、簡潔に説明する。

【エデュケーターとしてのスキルと役割に気づく】は、エデュケーターとして相手からうまく思いを引き出すことが重要であると感じ、聞く姿勢をもつことや、自分の思いを伝えるためのスキルが必要であることへの気づきを示すものである。「相手から思いを引き出す話術が必要である」「中学生の心を突きとめ、その気持ちに寄り添うことが必要である」「知識を自分のものにしていないと教えることはできない」などの記録単位で構成された。

【自らの性の知識・理解の増加を自覚する】は、これ

まで性に関して自分が知らないことがあったり、間違った情報をもっていたことに驚き、一連のプロジェクトを通して、正確な知識・理解が増加したことへの確かな自覚を示すものである。「あまりにも自分が知らなかった知識が多くあることに気づいた」「教える準備をすることによって正しい知識を身につけることができた」などで構成された。

【自らのセクシュアリティの捉え方の変化に気づく】は、これまで自分が抱いていた性に対する偏見が薄れていくことや、自己を価値ある存在として見つめ直すなど、セクシュアリティの捉え方が変化してきていることへの気づきを示すものである。「これまでと違い性に関する話をするのに抵抗がなくなったのは、自分の性の捉え方が変化したからだと思う」「これまで自分は女性なら結婚、出産、育児をするのが当たり前前の幸せだと思っていたが、そうではないことに気づいた」などで構成された。

【相手の中学生に今後を期待する】は、中学生にもこれを機会に自分の心やからだの成長に興味を持って大切にしてほしい、お互いに異性のことを理解する姿勢をもってほしいなどの中学生への期待感である。「中学生も自分たちの心や体の成長についてもっと興味を持ってほしい」「中学生は男の子と女の子を互いに知り、理解することで相手のことを大切に思う気持ちを持ってほしい」などで構成された。

【取り組みに対して自己達成感を得る】は、一連のプロジェクトへの変容と達成感の他、グループワークへの苦手意識の克服や、メンバーで意見を出し合っただけピアプロジェクトを成功させていく過程での喜びを含む。「グループで学習することは大変であったが、成功した喜びが得られた」「他人の意見と自分の意見を交換できることの楽しさがあった」「グループワークは苦手意識があったが、今回はそうでなく、やった感じがある」などで構成された。

【性意識の高まりを自覚する】は、性に対して今後もっと知りたい、もっと学びたい、もっと伝えたいという意識の高まりの自覚を示すものである。「性に対してもっと知りたい」「正しい知識をもっと伝えたいという気持ちが高まっている」などで構成された。

【相手の立場にたつことの大切さに気づく】は、ピアメンバーや中学生の立場や思いを理解して、相手の立場になって考えることの大切さへの気づきを示すものである。「相手を思いやる気持ちの大切さを実感している」「相

表1 ピアプロジェクトでの体験

カテゴリ	記録単位数
エデュケーターとしてのスキルと役割に気づく	(23)42.5%
自らの性の知識・理解の増加を自覚する	(6)11.1%
自らのセクシュアリティの捉え方の変化に気づく	(6)11.1%
相手の中学生に今後を期待する	(5)9.3%
取り組みに対して自己達成感を得る	(5)9.3%
性意識の高まりを自覚する	(5)9.3%
相手の立場にたつことの大切さに気づく	(4)7.4%

手の立場になって考えることの大切さに気づいた」などで構成された。

考 察

1. 「性を学ぶ」ことの自己肯定意識への影響

「性を学ぶ」ことに対する自己肯定意識の影響を検討するために、高村らのピアカウンセラー養成のモデルカリキュラムに準拠したピアエデュケーションの報告と照らし合わせてみる。今回のピアプロジェクトでは、ピアメンバーの対自己意識のなかの2サブスケールと、対他者意識の2サブスケールに変化がみられ、ピアプロジェクトを通して自己肯定意識が向上した。これは高村らのピア養成講座やピアカウンセリングを受けた学生を対象として自己効力感や自尊感情の変化をみた白井ら³⁾や前田ら⁴⁾の結果と比べ、自己意識の健康性が高くなったという点で同様の結果であった。今回の対象者は自律的に性を学んだエデュケータの学生であり、両者の性の学びの過程に違いがある。しかし両者とも「性を学ぶ」ことが共通しており、青年期の自己意識の健康性を高めるためには「性を学ぶ」ことが有効であるといえる。「性を学ぶ」には自らのことからだと対峙することが求められる、自己のセクシュアリティを見つめ直す機会になる。今回、ピアメンバーは単に【自らの性の知識・理解の増加を自覚する】だけでなく、【自らのセクシュアリティの捉え方の変化に気づく】【性意識の高まりを自覚する】に特徴づけられる自己変化の気づきを体験し、自己を価値ある存在として肯定的に捉え直していた。以上のことから、「性を学ぶ」一連の過程で、ピアメンバーはセクシュアリティの捉え方を変化させて、自己のからだやこころの肯定（自己肯定意識）を高めたといえるだろう。

2. グループワークが対他者意識へ与える影響

一般的に青年期は、同世代の友人から自分がどのように思われているのかという、他者評価が気になる年頃であるといわれている。平石¹⁾は健康な自己確立である「自己確立感」は、「自己表現・対人的積極性」などの他者関係の安定とも結びついているという。つまり、対他者意識を改善することは自己意識の健康性向上にとって必要不可欠である。今回のピアプロジェクトを通してピアメンバーは、対他者意識の「自己表明・対人的積極性」が上がり「非評価意識・対人緊張」が低下するなど、対他者意識を改善させていた。この結果は、思春期ピアカ

ウンセリング教室に参加した中学2・3年生の「非評価意識・対人緊張」に変化がみられなかったという結果¹⁵⁾と違っていた。ピアプロジェクトが対他者意識へ与えた影響について、グループでの課題学習の視点から考察する。

今回のピアプロジェクトでは、2ヵ月間にわたってのグループ課題学習期間があり、セクシュアリティについて学びあうことやピアエデュケーションの企画運営が課題とされた。Project-based Learning (PBL) は、学習プロジェクトに対してグループメンバー間で学ぶ経験に触媒として作用する¹⁶⁾といわれ、さまざまな教育分野で取り入れられている。PBLが学生の科学的な知識やプロフェッショナル・スキル獲得のうえで有効である¹⁷⁾ことはすでに明らかになっているが、なかでもメンバー間のチームワークが学生の成長に重要であるといわれている¹⁸⁾。今回のピアプロジェクトで、学生は【取り組みに対して自己達成感を得る】体験をしていた。そこには一連のプロジェクトの達成感の他、グループワークへの苦手意識への克服も含まれた。グループ課題学習で他のメンバーと時間を共有するなかで、自分を表現し、相手を理解することの大切さに気づきながら、協同して課題を成し遂げようとしたと考えられる。最終的に中学生に対してエデュケータとして関わり【エデュケータとしてのスキルと役割に気づく】【相手の立場にたつことの大切さに気づく】と表現された。これは、相手の思いをうまく引き出す、自分を表現する、共感的に関わることの大切さに気づく体験、つまりは、他者のなかで自己を生かす体験であるといえよう。それはグループ課題学習を通して時間をかけて醸造されたものであると考えられる。

これまでの思春期ピア研究の多くは、ピア講座を受けた受講生や思春期ピアカウンセリングに参加した中学生を対象にして講座の有効性について検討したものであった。しかし、今回は、グループ課題学習期間を通しての学生の自己肯定意識の変化について、特に対他者意識の改善の視点からその効果を明らかにできたといえる。

3. ピアエデュケーションへの今後の期待と課題

平石¹⁾は対自己意識の「自己実現的態度」を、「自己確立感」と表現し、その対立の「自己拡散感」との関係は、Erikson²⁾のいう「自我同一性」対「自我同一性拡散」の概念と多くの点で一致していると述べている。このことから、自己肯定意識を高めることは青年期の発達課題とされる自己アイデンティティの安定につながるの

ではないかと考えられる。今後、青年期の学生のピアエデュケーションが推進されて、自己肯定意識が高められていくことを期待する。

一方、今回のピアプロジェクトでは、自己肯定意識を構成する要素のなかの対自己意識の「自己受容」と対他者意識の「自己閉鎖性・人間不信」に変化がみられなかった。「自己受容」は、自分の個性を尊重し、受け入れ信頼することであり、「自己実現的態度」とともに「自己確立感」の主成分を代表する重要な要素である¹⁾。「自己閉鎖性・人間不信」は他者不信のために他者の中で自己を安定することができない状態をいう。これらは短期間のプロジェクトでは変化として現れにくいのではないかと考えられることから、今後はピアプロジェクトをさらに長期的に続行するなどの検討が望まれる。

結 論

1. 性のピアエデュケーションにエデュケーターとして参加した看護学生の自己肯定意識が向上した。
2. 性のピアエデュケーションにエデュケーターとして参加した体験は、【エデュケーターとしてのスキルと役割に気づく】【自らの性の知識・理解の増加を自覚する】【自らのセクシュアリティの捉え方の変化に気づく】に特徴付けられた。
3. 性のピアエデュケーションのエデュケーターとしての準備を含めた一連のプロセスが、看護学生にとって自己を肯定的に捉え直すうえで有効であることが示唆された。

文 献

- 1) 平石賢二：青年期における自己意識の構造—自己確立感と自己拡散感からみた心理学的健康—，教育心理学研究，38，320-329，1990。
- 2) Erikson, E. H.: Identity and the Life Cycle. New York: International Universities Press, Inc, 1959, 小此木啓吾訳編，自我同一性—アイデンティティとライフサイクル，誠信書房，1973。
- 3) 白井瑞子，松原文子，松本三祐，他：思春期ピアカウンセラー養成講座を受講した大学生によるプロセス評価及び受講生の自尊感情と性に対する態度の関連，香川大学看護学雑誌，10（1），51-63，2006。
- 4) 前田ひとみ，高村寿子，渡邊至，他：高校生を対象

- とした大学生による思春期ピアカウンセリングの評価（1），南九州看護研究誌，5（1），11-18，2007。
- 5) Mevsim, V., Guldal, D., Gunvar, T., et al.: Young people benefit from comprehensive education on reproductive health, Eur J Contracept Reprod Health Care, 14(2), 144-52, 2009.
 - 6) 高村寿子：今，なぜピアカウンセリングなのか，思春期の性の健康を支えるピアカウンセリング・マニュアルピアカウンセラー養成者・コーディネーター（調整役）版，10-18，小学館，2005。
 - 7) 安達久美子，高田昌代，西澤由季，他：ピアエデュケーションを用いた性教育に対する高校生の受け止め方，神戸市看護大学紀要，10，33-42，2006。
 - 8) 国広哲弥，堀内克明，安井稔編：プログレッシブ英和中辞典 [第4版]，小学館，2002。
 - 9) 安積遊歩，野上温子：ピアカウンセリングという名の戦略。青英舎，1999。
 - 10) 忠津佐和代，津島ひろ江，池田理恵，他：ピアカウンセリング手法を用いた思春期性教育とその実践，川崎医療福祉学会誌，12（2），259-270，2002。
 - 11) 高村寿子：思春期の性の健康を支えるピアカウンセリング・マニュアル—ピアカウンセラー（学生）版，小学館，2005。
 - 12) 平石賢二：青年期における自己意識の発達に関する研究（I）：自己肯定性次元と自己安定性次元の検討，名古屋大学教育学部紀要，教育心理学科，37，217-234，1990。
 - 13) 舟島なをみ：質的研究への挑戦，医学書院，42-79，1999。
 - 14) Scott, W. A.: Reliability of content analysis: The case of nominal scale coding. Public Opinion Quarterly, 19, 321-325, 1955.
 - 15) 五十嵐世津子，岩間薫，千葉貴子，他：大学生による中学生への思春期ピアカウンセリングの有効性，弘前大学大学院保健学研究科紀要，9，49-55，2010。
 - 16) Adams, C., Rowland, T., Mergendoller, J. R., et al.: Buck Institute for Education./http://www.bie.org/index.php/site/PBL/pbl_handbook_introduction/（アクセス2010.12.15）
 - 17) Wessel, C., Spreckelsen, C.: Continued multidisciplinary project-based learning-implementation in health informatics. Methods Inf. Med., 48(6), 558-63, 2009.
 - 18) 青木秀幸，鎌田元弘，山上登久：地域連携型PBL

においてチームの教育機能を高める協同学習支援の
実践とその評価, 工学教育, 57(3), 71-77, 2009.

Experience of nursing students participating in peer sexual education as educators and change in their self-positive-consciousness

Isako Ueta^{1,2)}, Aya Takagi¹⁾, and Chiemi Kawanishi³⁾

¹⁾*Tokushima Prefectural Tomioka-Higashi High School, Nursing Course, Tokushima, Japan*

²⁾*Graduate School of Health Sciences, the University of Tokushima, Tokushima, Japan*

³⁾*Institute of Health Biosciences, the University of Tokushima Graduate School, Tokushima, Japan*

Abstract The purpose of this study is to clarify whether the students who participated in peer sexual education as educators raised their self-positive-consciousness, and to clarify what kind of experience they obtained from activities they were involved in as educators. The participants were 11 nursing students who agreed to participate in and were in their final (fifth) year of a nursing program. They performed the peer sexual education to junior high school students. Before and after the delivery of the education, they were required to give their responses to the items in “Scale of Self-Positive-Consciousness”, and their responses were compared with those of 28 nursing students in the control group. From the written responses of the participants, the descriptions which expressed their experience in the activities were extracted, and content analysis was performed on them. While the Self-Positive-Consciousness of the control group did not experience a change, the peer members’ 4 subscales changed significantly ($p < 0.05$). Also, the experience of the peer education was characterized as the following types: [Realize the required skills and roles of an educator], [Aware of the enhancement in their own knowledge and understanding on gender], and [Realize a change in the way they grasp their own sexuality]. It was suggested that the processes involved in the preparation of peer sexual education are effective for educators to positively review their own selves.

Key words : peer education , sexual education, self-positive-consciousness